

宝物集(巻五)より

昔、釈迦如来、天竺の大国の王とむまれておはしまし、時、國靜かに、民おだやかにてすぐし給ふ程に、隣國に國あり、舅氏國といふ。彼國飢渴して、五穀種をたち、食物名字をきかず。このゆへに死骸道にみちて、ほとんど、國民餓死におよべり。舅氏國の人民相談して云く、「我等、徒に死なんよりは、隣國の大国にむかひて、五穀をうばひとりて命をいくべし。戦のならひ、勢による事なし。一日と云とも存命せん事、こひねがふ所也」とて、すでに軍だつを、大国きつて、万が一の勢なるがゆへに、かるめ、あざけりて、手どりにせんとするをきつて、大王、大臣・公卿にのたまはく、「合戦の時、おほくの人死なむとす。ねがはくは戦をとむべし」と制したまひければ、「宣言と申ながら、この事こそ、力および侍らね。我、合戦をこのむ事なし。隣國す、みおそふ。たゝかはすは存命すべからず」と申侍りければ、大王ひそかに后をよびはなちて、「我、國王としてかせんをこのまば、おほくの人死なんとす。我、深山にこもりて仏法を修行すべし。汝いかゞおもひ給ふ」とかたらし給ひければ、后、「大王をはなちたてまつらずして多年におよべり。今更にかゝはなれ奉らん」とのたまひければ、「君は女人也。隣國来るといふとも、よもころし奉らじ。よくくはからひ給へ」とこしらへたまひけれども、つゝに大王にぐして深山へ籠り給ひぬ。

大国の軍、國王のうせ給へりしことに驚きて、たゝかふ事なくして小國にしたがひぬ。大王深山にして、峰の木の実をひろひ、沢の若菜をつみて、おこなひたまひけるほどに、一人の梵士出来り、「大王のかくておこなひ給ふ事、希代の事也。我、御伽つかまつるべし」とてつかへ奉る。大王、有難、うれしくおぼしめしてすぐし給ふほどに、大王峰の木の実をひろひにおはしたるまに、この梵士、后をぬすみてうせぬ。大王かへり、み給ふに、后のおはせざりければ、山ふかくたづね入給ふ。道に大なる鳥あり、二の羽おれてすでに死門にいりぬ。大鳥、大王に申さく、「日来つきたてまつりたりつる梵士、后をぬすみ奉りてにけ侍りつるを、大王かへりたまふまでとおもひて、みせざりつれども、梵士、竜王の形を現じて、二の羽をけをりたり」といひて、つゝに死門に入ぬ。

大王あはれとおぼして、高き峰にほりうづみて、竜王にてありけると云事をしりて、南方にむかつておはしましけるほどに、深山の中に、無量百万の猿あつまりて、のしりける所へおはしぬ。猿、大王をみつて、よろこびたのしといはく、「我等年来領する山を、隣國よりうちとらんとするなり。明日午の時に、戦定るべし。大王を以て」大将とすべし」といふ。大王おもひかけぬ所へ来りて、くやしと思ひながら、「うけ給ぬ」とてみたまひたりければ、弓矢を以てきて、大王に奉れり。いふがごとく、つぎの日の午の時ばかりに、池にうき草なびきて、数万の兵をそひきたる。大王、猿のすゝめによりて、弓をひきてかたぎにむかひ給ふに、弓勢人にすぐれて、臂、背中にまはる。かたぎ、大王の弓勢をみて、箭をはなたざるさきに、にげぬ。猿等大によろこびて、「このよろこびには、いかなる事をかせんする」といひければ、大王、猿等につけてのたまはく、「我、年頃の後を竜王にぬすみとられたるゆへに、竜宮城にむかひて南方へゆくなり」とのたまひければ、猿等申さく、「われらが存命、ひとへに大王のちから也。いかでかその恩をおもひしらざらん。すみやかにをくり奉るべし」とて、数万の猿、大王にしたがひてゆく。

南海のほとりにあらざりければ、いたづらに日月ををくるほどに、梵天帝釈、大王の、殺生をおそれて國をすて、猿の、恩をしりて南海にむかふ事をあはれとおぼして、小猿に變じて、数万の猿の中にまじはりていふやう、「かくていつとなく竜宮をまもるといふとも、かなふべきにあらず、猿一して板一枚、草一把をまうけて、橋にわたし、後にくみて、竜宮へわたらん」といひければ、小猿の僉議にまかせて、をのく板一枚、草一把をかまへて、橋にわたし後にくみて、自然に竜宮城へいたりぬ。竜王いかりをなして、大きなる声をおこして、それをやりて光をはなつほどに、猿霧にあひ、雪におそれたをれふしぬ。小猿、雪山にのぼりて、大薬王樹と云木のえだを折て、かへり来りて、あひふしたる猿どもをなづるに、たちまちにあひさめ、心たけくなりて竜をせむ。竜王、光をはなちてひらめきけるを、大王を以て射さす。竜王、大王の矢にあたりて、猿の中におちぬ。小竜等この事を見て、たゝかはすしてにげさりぬ。猿等、竜宮にせめ入て后をとるかへし、七宝をうばひとりて、本の深山にかへり、さて、彼舅氏國の王うせにければ、大国小國臣下等、此大王をしのびて、むかへとりて二ヶ國の王として有。猿丸の、竜宮城をせめてうちとらん事、おぼ(う)けにはかなひがたき願にぞ侍るめる。こまかには六波羅蜜經にぞ申ためる。